

携挙の奥義

The Mystery of The Rapture By Amir Tsarfati

日本語字幕版 <https://www.youtube.com/watch?v=5846i4egDJA>

英語版オリジナル--2017年1月22日公開: <https://youtu.be/AFdnVa34aac>

メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel: <http://beholdisrael.org/>

日本語訳 by ガスタフソンあつみ

日本語字幕 DivineUS: <http://divineus.org/>

YouTube チャンネル <https://www.youtube.com/user/TheDivineUs>

本日もマニラの中心から、皆さまと一緒できることを大変光栄に思います。私は1998年以来、フィリピンを訪れています。2歳の時からです。それは冗談ですが、主が私をこの国に招いてくださり、この場所における神の素晴らしい御業を見えています。私は神がこの国で素晴らしいことをなさっていると信じています。神は正義を取り戻しておられ、この国の街角に安全と平和を回復させておられます。私は神がもっと多くの働きをしてくださると信じています。そうですね？その反応では、皆さんはあんまり期待していないようですね。もう一度お尋ねします。そうですね？あつ、今度はずっといいお返事です。

何か月も祈りに費やすことに関して、私の大好きな聖句の一つは、ヤコブの手紙第5章16節の後半です。
「義人の祈りは働くと、大きな力があります。ヤコブの手紙5:16b」

「義人の祈りは働くと、大きな力がある」と信じている方々は、どのくらいいらっしゃいますか。なぜ私がこの聖句が好きかと言うと、この聖句は私たちが効果的に、そして熱心に祈らなければならないことを示しているからです。

そして「義人」という言葉が入っています。私たちの義はイエスです。聖書にはこう書かれています。

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方において、神の義となるためです。コリント人への手紙第二5:21」

私たちは、罪を知らないのに罪とされた方を信じることによってのみ、義となることができます。キリストは私たちの罪を負い、私たちにご自身の義を下さいました。ですから、私たちが罪を知らなかった方を信じて義になるとき、「義人の祈りは、働くと大きな力がある」のです。

もしもあなたのご自分の罪のために神から引き離されているなら、神は絶対にあなたの祈りを聞くことはできません。イザヤ書の中で、聖書は罪が私たちが神から引き離したと言っています。そしてイエスのおかげで、私たちの罪はなくなりました。イエスは赦してくださり、私たちから罪を取り去られました。そこで、私たちが今この時に義であることが、効果的で熱心な祈りをする力を与えてくれるのです。

残念なことに、多くの信者は、祈ることをしないか、あるいはその祈りは彼らの霊的な歩みを反映するもので、それはあまり効果的ではなく、決して熱心なものではありません。

私自身は個人的に、こーか半月で効果的で熱心な祈りというものを2度体験しました。この二つの体験は、私たち信者には、国際的な出来事を変えることのできる力があることを示してくれました。私たちには、他の世界的指導者たちや、世界中の億万長者たちにさえもできないようなことを成し遂げることができ、それはすべて祈りの力によるのです。Behold Israel のミニストーリーは過去半年で急成長し、世界208か国の人々が視

聴しています。聞いたことのない国の人たちまでいます。小さな小さな島国でも。みんな BeholdIsrael.org から私のメッセージを觀たり、携帯電話に BeholdIsrael の無料アプリをダウンロードして、イスラエルのニュースや私のメッセージを受信したりしています。私は、そこまで大きくなったのなら、時折、時には数日置きにでも、預言アップデートなるものをフェイスブックでライブ配信し、そこから YouTube でも配信したらどうだろうかと思ったのです。それは世界中で何千人もの人に視聴されています。そこで私はこう考えました。ソーシャル・メディアを通して私たちにこんな力があるのなら、義人の効果的で熱心な祈りに、これを利用してはどうだろうか。

皆さんも覚えていらっしゃると思いますが、一か月半前(2017年1月22日現在)には、ドナルド・トランプ氏にはアメリカ大統領選での確かな勝算があったわけではありません。私はマスコミのことをミデヤン人と呼んでいますが、彼らはすでにヒラリー・クリントンに次期アメリカ大統領としての榮譽を与えていました。

安息日である土曜日に、私はイスラエルの教会で、良い羊飼いと悪い羊飼いについてのメッセージを聞きました。聖書はエゼキエル書第34章で、良い羊飼いというのは羊の世話をする羊飼いであるとしています。だから、ヨハネの福音書21章で、イエスはペテロにこう言われたのです。「あなたがわたしを愛するなら、わたしの羊を飼いなさい。わたしの羊を牧しなさい。」一番大切なのは羊です。あなた自身ではありません。しかし、神はエゼキエル書34章において、その時代のイスラエルの羊飼いたちのことを、羊の世話をせず、自分たちの世話をしているとしてお責めになりました。

アメリカ大統領選の最終段階はまさにこの通りでした。クリントン財団のすべての汚い業や、クリントン候補が國務長官という立場を利用して、夫(ビル・クリントン元大統領)が講演する機会を整え、何百万ドルものお金を稼いで、それを自分たちの懐に入れてきたことが明るみに出ました。オバマ大統領だって、働いたことなど一日もなかっただろうと思います。学生であったオバマ氏はそこから直接、政界に足を踏み入れ、今では百万長者です。

皆さんもお分かりでしょうが、大方において、アメリカ人の大多数、労働者階級の人たちはすっかり忘れられ、工場は閉鎖されていき、人々は絶望的になっています。生活保護に頼っているアメリカ人の数は著しく増加し、路上での暴力も同様です。私は、これこそが羊の世話をしていないリーダー、つまり羊飼いなのだと思いました。そしてこう思いました。インターネットを利用して、アメリカのクリスチャンたち、特に福音派のクリスチャンたちに、あの不義な羊飼いを取り除いて、彼らの面倒をみってくれる人を立てる方法があること、投票に行くだけでよいことを呼びかけよう、と。

アメリカ合衆国のほとんどの福音派のクリスチャンは、有権者登録さえもしていないことを念頭に置いてください。彼らはあまりにも無関心で、ただ祈りに頼ろうとするだけでした。でも、神は、時には、武器を授けてくださるのです。ただ祈るだけでなく、実際に何かをするために。そしてそれは「投票」と呼ばれるものなのです。私はインターネットを通して強く勧めました。「もしあなた方がそのような羊飼いを取り除いて、あなた方の世話をしてくれる羊飼いを立てたいと思うなら…」と。

ところで、みなさんは就任演説をお聞きになったかどうか分かりませんが、トランプ氏は大衆にこう言いました。「ワシントンのペテン師たちは皆、自分たちのことを大切にしているけれど、私はあなた方を大切にします。」

興味深いことに、私が祈りを呼びかけると、50万人の人々が応えてくれたのです。私たった一人で、です。何人の人たちが祈りを呼びかけたか、そして何百万の人々がひざまずいて祈ったか、想像できますか。そして、義人の祈りは働く、大きな力があるのです。聞いてください。私には、皆が投票に行けば、ドナルド・トランプがアメリカの次期大統領になるだろうという、平安がしっかりあったので、選挙日の夜は、朝起きたらトランプが選ばれていることを確信して、床に就きました。そしてまさにその通りになったのでした。私に言えるのは、義人の祈りは働く、確かに大きな力があるのだということです。

それから、一週間半前(2017年1月15日)には、72か国がパリ市内に集まりました。彼らの目標は一つ、イスラエルの地を分割すること、エルサレムを分割すること、ユダヤ人に嘆きの壁はイスラエルのものではなく、エル

サレム旧市街のユダヤ人地区もイスラエルのものではないと告げること、つまり基本的にエルサレムの地を分割することでした。私はまたインターネットを使って、ここフィリピンのボラカイ島からフェイスブックのライブ配信をしました。あそこのインターネットの通信速度は、結構速いんですね。25万人の人たちが応答してくれたのです。世界中で祈りがなされ、先ほども言いましたように、208か国に住む人たちと繋がっていると、文字通り、地理的に地球全体がカバーされるのです。何が起こったかと言うと、人々が祈りの要請に応じてくれて、なんと、パリ会議は外交上、過去20年間における最大の失敗に終わりました。実際、何もかもがダメになったのです。パリ和平会議の文書を承認したのはヨーロッパ連合だけという有り様で、彼らはあまりにも気まづくなったので、安全保障理事会で投票するために国連にまで持って行きました。これこそが、聖徒たちによる効果的で熱心な祈りの力です。

皆さんにも理解していただかないといけないことは、聖書には、
**「不法の秘密はすでに働いています。しかし今は引き止める者があって、自分が取り除かれる時まで引き止めているのです。その時になると、不法の人が現われます…
テサロニケ人への手紙第二(2:7-8)」**

と書かれていることです。

その意味するところは、私たちが「引き止める者」であるということです。そして一旦、私たちが、私たちの内に宿る聖霊と共にこの世から取り除かれると、大混乱が起こります。そこで、皆さんには二つの役目があります。一つ目は、ひざまずいて、引き止める力として、邪悪な物事や出来事が起こるのを阻止するために祈ることです。二つ目には、皆さんには見張り人となることが求められています。城壁の上の見張り人です。エゼキエル書33章を読むと、聖書には次のように書かれています。見張り人が置かれると、その見張り人は危険が迫って来たときに角笛を吹き鳴らすことになっています。あなたが危険が迫ってきたために角笛を吹いても、それに耳を傾けない人がいて、その人が死んでしまったら、それはその人自身の過失となります。しかし、あなたが見張り人でありながら、あなたが角笛を吹き鳴らさず、人々に警告を与えていないなら、誰かが不注意で死んでしまったとしても、その人の血の責任はあなたにあるのです。見張り人として、何が起ころうとしているかを知っているなら、私たちは、断然、黙ってはいけません。

聖書には、イザヤ書46章9～10節に、こう書かれています。

**「遠い大昔の事を思い出せ。わたしが神である。ほかにはいない。わたしのような神はいない。わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ、
『わたしのはかりごとは成就し、わたしの望む事をすべて成し遂げる。』と言う。
イザヤ書46:9-10」**

神は終わりの事を初めから告げられます。神はその子供たちに、ご自身の計画を知ってほしいと願っておられます。ですから、皆さんが聖書を読み、みことばに浸っていれば、次に何が起こるかが分かるのです。ニューヨークでマンハッタンの街を歩いていると、非常に多くの占いの店が目に入ってきます。それは、お金を払って、暗い部屋の中で醜い男性か女性の前に立ち、あなたの未来について教えてもらう場所なのです。それは外れることが多いです。人は未来を知りたいが、未来に何が起こるかを知らずして、暗い部屋の中で醜い男性か女性かが告げることを聞くために、お金まで払うのです。聖書が無料で教えているのに！人々は、私たちのこの書、聖書には29パーセントの割合で未来の出来事が含まれているということを理解していません。聖書の29パーセントは預言なのです。神は私たちに、未来のことまでも知ってほしいと願っておられるのです。ですから、神は「わたしは、終わりの事を初めから告げ、まだなされていない事を昔から告げ」とおっしゃるのです。イザヤ書もエレミヤ書も、エゼキエル書も読みたくないという人たちがよくいます。もしかすると、それは彼ら預言者自身による解釈であって、神からのものではないかもしれないから、という理由からです。

いいですか、聖書には次のように書かれています。ペテロの手紙第二1章20～21節です。

「それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。ペテロの手紙第二1:20-21」

と言うことは、神がイザヤやエレミヤや、エゼキエルといった人間を通して語られたということで、それはそれらの人物の解釈を受けてはいないということです。彼らは立って、神の霊、すなわち聖霊が、彼らの口を通して神からの言葉を語るのに任せ、後にそれを筆記し記録したのです。それだけです。ですから、イザヤやエレミヤやエゼキエル、そしてヨエルやミカの言っていることは、人の口を通して語られた純粋な神のみことばなのです。

「私は預言者になりたい」と言って預言者になる人はいません。預言のための学校などというものはありません。「さあ、預言しよう！」なんてことは、ありません。。神がある人を預言者として召命するか、しないか、というだけです。私はいつも、「私は非プロフィット(預言/営利) 団体(NPO)の者です」と言っています。私は預言者ではありません。ジョークだったんですが、いいでしょう。ただ皆さんに分かってもらいたいのは、これらの人々が、神が世界の人々に告げたかったことを伝えたのだということです。

クリスチャンが聖書を持たないで教会に来たり、詩篇つきの新約聖書だけを持って来たりするのをよく目にします。その聖書は半額だったらいいなと思います。それは聖書の半分だけなんですから。旧約のない聖書なんて、考えられません。旧約が旧約と呼ばれるのは、新約が新しいからに他なりません。新しいものが古いものを古くするのは、それは時代遅れになったわけでも、重要でなくなったわけでもありません。もしそれが重要でないなら、イエスはそこから引用しなかったはずで。皆さんもイエスが一度たりとも新約聖書から教えたことがなかったことはご存知ですね。イエスが新約の聖句を引用したことは一度もありませんでした。イエスも、パウロも、ペテロも、誰一人として、新約聖書からは一度も引用していません。彼らは新約聖書を書いていたんですから。神のみことばについて語る必要があった時には、いつも必ず旧約聖書にあるみことばでした。イエスご自身が、ルカの福音書24章で言われました。「モーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就する(ルカ24:44)」と。「全部」、「必ず」です。

そこで、新約の話をする、ヘブル人への手紙1章1～2節には、イエスについて次のように書かれています。**「神は、むかし先祖たちに、預言者たちを通して、多くの部分に分け、また、いろいろな方法で語られましたが、この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。**

ヘブル人への手紙1:1-2」

イエスは、預言者に始まったものを継続しました。イエスはそれを継続し、否定しませんでした。預言者たちが書いたことはすべて、必ず成就するとおっしゃったのです。そして、その多くが、現実に、イエスの時代に成就したのです。

本日のメッセージの題名は「携拳の奥義」です。奥義というのは、秘密ではありません。この二つは同じではありません。秘密というのは、何かあなたが一度も聞いたことのないもののことです。それはあなたには隠されていて、見ることも感じることもできません。あなたに明かされる時は、あなたがそれを初めて聞くときでもあります。他方、奥義というのは、あなたが過去に見たり聞いたりしたことのあるもので、その真の意味がどういうものであるかを、あなたがようやく本当に理解したもののことです。奥義という言葉のギリシャ語は『ムステリオン』で、そこから『ミステリー(奥義)』という言葉ができました。ギリシャ語の新約聖書では、別々の場所で28回登場する

言葉です。このことは、新約聖書には、旧約聖書において私たちにすでに告げられ、与えられていたことに関する驚くべき啓示が含まれていることを示しています。

例えば、イスラエルのための神のご計画をとりあげましょう。ローマ人への手紙11章には、「その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは…」とあります。つまり、イスラエル人はメシヤを見ることができず、ほとんどの人たちとまではいかなくとも、一部の人たちは、ある種の盲目状態を抱えているのです。ところが、聖書にはこうあります。

「かえって、彼らの違反によって、救いが異邦人に及んだのです。それは、イスラエルにねたみを起こさせるためです。ローマ人への手紙11:11」

お分かりですか。ユダヤ人にねたみを起こさせるために、異邦人に救いが与えられたのです。つまり、神には、イスラエル人をかたくなにしてまでも、お望みになる目的があったのであり、その目的とは、福音が全世界に広められることだったのです。

私の言うことを信じてください。私には私たちイスラエル人の国民性がよく分かっていますから。もしもユダヤ人が2000年前にキリストを受け入れていたとしたら、私たちは絶対に皆さんとお分かちすることはなかったでしょう。けれど、ご存知の通り、彼らは心をかたくなにしました。神は彼らを盲目にしました。彼らが心をかたくなにしたからです。そのために、福音が全世界に与えられました。すごくないですか？これは奥義です。私たちには決して理解することができないでしょう。でも、神は驚くべき素晴らしい神です。神には不公平さはありません。神はあなたがたを愛しておられます。世界中のユダヤ人を一人ひとり愛しておられるのと同じようにです。ところで、神はイスラム教徒も愛しておられます。ヒンドゥー教徒も愛しておられます。けれども、神はすべての人にイエスのことを信じてほしいと願っているのです。道も真理も命も、「この方をおいてほかに救いはありません。われらを救うべき名としては、これ以外、天下のだれにも与えられてはいません。(使徒行伝4:12)」そしてその名はヤシュア、すなわちイエスです。

ですから、イスラエルのための計画は、聖書によると、最終的に「イスラエルはみな救われる、ということです。ローマ人への手紙11:26」すごいですね。理解しがたいことです。これは奥義です。

では、別の奥義をとりあげましょう。真のメシヤについての奥義です。ユダヤ人の考え方では、メシヤは受肉した神ではなく、ただ良い人物で、おそらくカリスマ性のある人で、馬に乗っていて、平和と繁栄をもたらし、エルサレムから世界全体を統治すると思われるのです。彼らはそれを待っているのです。

しかし、真のメシヤは、ゼカリヤ書9章9節によると、ロバに乗って来なければならず、イザヤによると、処女から生まれなければならず、ミカ書5章によると、ベツレヘムで生まれなければならず、イザヤによると、不思議な助言者、永遠の父、力ある神なのです。ですから、メシヤは、処女から生まれる男子でなければならず、ベツレヘムで誕生しなければならず、それでいて受肉した神なのです。そして、そのお方が支払う究極の犠牲は、イザヤ書53章によると、私たちの代わりにご自身をお捧げになることなのです。イエスが地上に来られて初めて、その奥義は明らかにされたのでした。

また、よく誤解される奥義に、教会とキリストの奥義があります。聖書は、「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。(エペソ人への手紙5:25)」と言っています。たくさんの夫たる男性たちが「マジで？そんなに？」と思っているのは分かっていますよ。そうです。旧約聖書ではいつも、イスラエルは妻に例えられ、神は夫に例えられています。彼らが荒野の種も蒔かれていない地を、いかに神に従って進んだかを、神は非常に好まれ、「わたしは…婚約時代の愛…を覚えている」とおっしゃいます。驚いたことに、イスラエルと神とは、ある種の婚約関係にあったのです。そして福音が全世界にもたらされて、ここにいらっしゃる皆さん全員がイスラエルに接ぎ木されると、今度はあなた方が花嫁となります。イエスが花婿なのです。さあ、奥義は解けました。教会とキリストが、花嫁と花婿です。よろしいですか。

それでは次に、まもなく起こる携挙の奥義についてお話ししましょう。聖書には、**「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです(コリント人への手紙第一15:51)」**

と書かれています。

「眠ってしまう」ということがどういう意味なのか、また「変えられる」ということがどういう意味なのかを調べてみましょう。

また別の奥義に、異邦人相続者の奥義というものがあります。ユダヤ人には、ホセア書に**「わたしは…『わたしの民でない者』を、『あなたはわたしの民』と言う」**と書かれていることの意味が決して分かりませんでした。でも、私たちには分かりますね。皆様方、かつては全く希望がなく、神を知らず、他の神々を信じていたあなた方は、ゴイム、つまり異邦の民でした。古代においては異邦人は皆、異教徒でした。みんな異教徒だったのです。今では皆さんは真のメシヤを知り、イスラエルの王を知り、イスラエルの神を知っており、皆さんたちは、今や息子や娘であって、皆さんは「アバ、父よ」と呼びかけることができ、皆さんは神の王国の相続者となったのです。そうですね？

そして最後になりましたが、不法の奥義も大事です。不法というのは、法が存在するのに、それに従おうとしないことです。最初の法、最初の規則、神がアダムに求めた一番最初の要請は、「あの木があるだろう。あの実が見えるだろう。あれには触れてはならない。」それだけでした。非常に単純です。それでどうなったでしょう。神がしてはならないと言った、そのたった一つのことを、直ちになされたのです。

罪が世に入ってきて、罪が世に暗やみをもたらしました。そしてこれはすべて不従順のためなのです。だから神は聞き従うことはいけにえにまさるとおっしゃるのです。(第一サムエル15:22)

「わたしには、あなたの祈りは要らない。あなたのお金も要らない。あなたのいけにえも要らない。わたしはあなたの従順を求めるのだ。」そこが始まりです。

不法の秘密というのは、不法を始めた者、つまりサタン自身の秘密なのです。その霊は世界中に存在し、彼は最終的に世界を支配しようとしています。これも奥義です。これは、創世記に始まって、私たちがいなくなる携挙というものの観点からのみ、理解できるものです。

そこで、コリント人への手紙第一15章51～52節を見てみましょう。

「聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。コリント人への手紙第一15:51」

信者はただ死んでしまうわけではありません。聖書によると、私たちは眠るのです。お子さんのいる方々は、子供が居間で寝てしまったら、優しく抱き上げて寝室に移してあげてください。信者である皆さんが、この世界で死んでしまったら、同じことが起こるのです。神はあなたを抱きかかえて、この世界のベッドから、天の家へとそっと移してくれるのです。あなたが属する場所で眠れるように。そうなんです。私たちは永遠に死ぬことはありません。私たちはただ一時的に眠るのです。興味深いのは、まず、「私たちはみな眠ってしまうのではなく」と書かれていることです。これは基本的に私たちの中には死なない者たちがいる、言い換えれば、イエスが花嫁を迎えに来られるとき、私たちの中にはまだ生きている者たちがいることを示しています。

それから、「私たちはみな眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです」と書かれています。どのように変わるのでしょうか。第一に、どんな過程で変わるのでしょうか。聖書には「たちまち、一瞬のうちに」と書かれています。さあ、私の目を見てください。私は瞬きをしています。「一瞬」です。かなり速いですよね。では、これはどうでしょう。3つ数えますから、皆さん手を叩いてください。一、二、三！いまいちですね。もう一度やってみましょう。

一、二、三！それくらい速いんです。と言っても、今のはちょっと遅かったです。今日の第一礼拝の人たちの方が速かったです。

私たちはそのようにして変わります。「ぱっ」と。

「終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちが変えられるのです。コリント人への手紙第一15:52」

私たちはまさにそのように変わるのです。一夜にしてスーパーモデルになると言っているのではありません。私たちの体が朽ちないものになるのです。私たちの体の、毎日死んでいく細胞が、もう死ななくなるのです。そして自然の法則は私たちには当てはまらなくなるのです。重力が私たちをここに抑えつけておくこともなくなるのです。聖書は、「死者は朽ちないものによみがえり、私たちが変えられる」と言っています。すごいですね。パッ。誰かとお喋りしている間に、「バンッ」といなくなるんです。重力の法則がなくなって、朽ちないものになって、私はいなくなるのです。私たちはこの世には属していません。私たちの国籍は天にあります。そして私たちは、私たちが属する場所に行くのです。メリー・ポピンズみたいに、私たちがフワフワ昇って行くのをみんなが見ているようなことにはなりません。聖書には、「たちまち、一瞬のうちに」と書かれています。最後のラッパが鳴ることについては色々な考えがあるようですが、それはここではなく、天で鳴るのです。テサロニケ人への手紙第一4章を見れば、それは分かります。

ところで、携挙とは何でしょう。「携挙」という言葉は聖書に登場することはありません。そのため、非常に多くの教会が携挙について教えることをしないか、あるいは、携挙というものに関して完全に間違った考えを持っていたりします。「携挙」という言葉は、本当に聖書にはないからです。でも、何と言いますか、聖書はそもそも英語で書かれたわけではありません。原語は英語ではありません。新約聖書の原語は、大部分がギリシャ語です。失礼ながら言わせてもらいますが、英語で言葉を探さないで、ギリシャ語で探してください。該当するギリシャ語の単語は『ハーパーゾ』です。言ってみてください。『ハーパーゾ(ἁρπάξω)』です。そしてそれがラテン語に訳されて『ラプトゥロ(RAPTURO)』になり、そこから『ラプチャー(RAPTURE)・携挙』という語が生まれました。携挙(Rapture)という言葉は、ラテン語から来ていて、そのラテン語はギリシャ語からとられたもので、そのギリシャ語は『ハーパーゾ』です。そしてそれは聖書に出てくる言葉なのです。それはテサロニケ人への手紙第一4章17節に出てきます。

そして、それだけではなく、ハーパーゾという言葉はそれ以外の場所でも見つかります。「取り去られる」とか「連れ去られる」というのは、地上から天に、というだけではなくて、ここからずっと離れた通りまで、今この瞬間に、ということでもありえます。交通渋滞を避けられるのです。ハレルヤ。それだけでも奇跡じゃないですか。お分かりいただきたいのは、例えば、そのハーパーゾという言葉は、使徒の働き8章39節に登場します。伝道者ピリポがエチオピア人の宦官と馬車に同乗して、その宦官にメシヤのことを教えていたシーンです。ところで、ピリポはヨハネの福音書3章16節は引用しませんでした。ヨハネの福音書には全く触れていません。彼は一つの書しか持っていませんでした。当時は、誰も聖書を持っていませんでした。聖書というのは皆さん全員が少なくとも一冊は持っているべき書物です。私は皆さんが今日も持参されていることを強く願っています。私が言おうとしていることは、当時は、超億万長者にしか、聖書全体を手にするにはできなかったらうと言うことです。それらの書は、巻物の形になっていて、今のような本の形をしていませんでしたから、その巻物や、全書を所有している人は非常に稀でした。

さて、ピリポはその馬車に乗っていて、そのエチオピア人の宦官と同席し、一つの書だけを使いました。どの書だったでしょう。イザヤ書です。聖書によると、ピリポはイザヤ書を読んで、そのエチオピア人を主に導きます。そのエチオピア人は「私がバプテスマを受けるのに、何かさしつかえがあるでしょうか」と尋ねます。何も無い、と言うこ

とで、彼らは馬車を止め、水の中へ降りて行って宦官にバプテスマを授けました。それからどうなったかという、聖書には、

「水から上がって来たとき、主の霊がピリポを連れ去られた(使徒の働き8:39)」

とあります。『ハーパーゾ』、『ラプトウロ』、『ラプチャー(携挙)』です。縦向きではなくて横向きの。ピリポは消えてしまいました。そのエチオピア人が信じてからまだ2分間しか経っていませんでした。彼は40秒前に洗礼を受けたばかりでしたが、すでに携挙という事象を体験したのです。興味深いですね。「これはあまりにも普通じゃないな。彼は逃げ出してしまうかもしれない。だってこれは間違ってるから。彼はそんなもの信じていないんだから」と思われるかもしれませんが。皆さん、時には、20年や30年も主と共に歩んできた人たちよりも、ほんの20秒前にキリストを受け入れた人の方が、よほど強い信仰を持っていることがあるのです。この人物は、ピリポが突然目の前から消えてしまっても、これは奇妙すぎると言って逃げ出す代わりに、「喜びながら帰って行った」と聖書に書かれています。神の霊があなたの内において、あなたが子どものように純粹に信じるなら、あなたは喜ぶのです。

いいですか。3年間イエスに従って歩いたペテロがお墓に行った時、お墓は空っぽでした。彼は喜んでいましたか？いいえ、彼はイエスを探し、何が起こったのか頭を悩ませ、頭をかきながら帰って行きました。喜びも嬉しさもありません。長年イエスとともに歩みながら、イエスのおっしゃっていることを本当には聞いていなくて、それが起こったときに信じるとは、なんと悲しいことでしょうか。

もう一つ、携挙という出来事は、コリント人への手紙第二12章2～4節でも起こっています。パウロはギリシャにいるコリント人へ宛てた手紙の中で、こう言っています。

「私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に——肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。——第三の天にまで引き上げられました。コリント人への手紙第二12:2」

『ラプトウロ』、ギリシャ語では『ハーパーゾ』、この言葉が使われているのです。パウロが描写しているのは、ある人が『携挙』されて、いわゆる『パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いた』という体験です。彼はある理由のために、しばらくの間、携挙されました。ですから、私たちはこの『携挙』という概念に対して、そんなに当惑しなくてもいいのです。過去にも起こったことですから。

テサロニケ人への手紙第一4章16～18節を開いてみましょう。

「主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラツパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。」

携挙は世に用意ができていない時に起こる、ということ覚えておいてください。聖書には、それはちょうどノアの日のものであると書かれています。人々は結婚したり、飲んだりしているのです。携挙礼拝をしようとか、教会に立って、さあ携挙されよう！という風にはなりません。聖書によると、ラツパの響きや喜びの大騒ぎは天で起こるのであって、地上ではありません。御使いたちは用意をし、神のラツパが鳴らされます。そして何が起こるかと言うと、パウロがテサロニケ人に宛てて書いたように、

「それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。

テサロニケ人への手紙第一4:17」

興味深いですね。重力の法則がなくなって、私たちは取り去られます。そして私たちは、恐らく生まれて初め

て、世界中の信者に会うことになるでしょう。初めてです。想像できますか。天国に着いたら、「あ～、こんにちわあ。」(知らなかったわ。)
「わあ、彼も来たのね。主を称えましょう。あら、牧師先生はどこかしら？」行ってみるまでは、分かりません。ある人が言ったことがあります。私たちは天国に行くと、いるはずの人がいなくて驚き、また、いないはずの人がいて驚くことになります。とにかく、この地球上のすべての信者たちが皆で初めて出会うのは、雲の中なのです。すごいことだと思いませんか。空中で会うんです。地上じゃないんです。受け入れてください。あなた方は引き上げられるんです。

ハーパーゾ。ラプトウロ。ラブチャー(携挙)。

そして最も素晴らしいのは、ここ、

「このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります」

というところです。イエスは、私たちを迎えに来ると約束してくださいました。イエスは、「わたしはいなくなります。わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。わたしはあなたがたのもとに聖霊を送って、あなたがたを慰め、導き、教えます。そして、わたしは戻ってきます。わたしは戻って来るのです。」と、言われたのです。とっても素敵なことです。

ところで、取られるのは私たちが初めてというわけではありません。なんと、旧約聖書には、創世記5章24節にエノクという名前の人物が登場します。死なないで取られたのは彼が最初でした。それから預言者エリヤ。彼は、ただ取られたのではありません。彼はすごい演出好きで、馬車で連れ去られたいと願いました。彼はそうやって天に上りました。そして当然ながら、使徒の働き1章9節にあるイエスの昇天があります。初めの二人と、イエスとの違いは何でしょうか。その二人は一度も死にませんでした。イエスは死ななければなりませんでした。イエスのご自身を捧げるために、この世に来られました。彼は死んでよみがえり、そして天に昇られました。これが基本的に、第一の復活の始めでした。それ以前によみがえった人たちは皆、ラザロのように、その後すぐに亡くなりました。ラザロはある理由があって、しばらくの間、甦らされました。でも、彼はその後、死にました。彼は永遠に生き続けることはできませんでした。なぜなら、聖書はイエスが眠った者の初穂だと言っているからです。よみがえって永遠に生きるのはイエスが最初なのです。ということで、この三つのケースがあったことがわかりました。

ですが、なぜ私たちは携挙されなければならないのでしょうか。どうしてイエスは戻って来て、その王国を地上に確立することができないのでしょうか。それには理由があるのです。

まず第一に、イエスは私たちを迎えに来ると約束されました。お分かりですか。イエスは必ず約束を守られます。ヨハネの福音書14章3節において、イエスは次のようにおっしゃっています。「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、」と言うことは、今イエスは私たちの場所を備えるために働いておられるということです。そうしたら、「また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」迎えるという意味のこのギリシャ語は、私たちがイエスのもとに行って、イエスが私たちを受け入れるということを示しています。それから、こうおっしゃっています。「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」ここで住所変更するのは誰でしょうか。私たちです。今、イエスはどこにおられますか。イエスは今、御父の右におられます。天におられるのです。私たちは今どこにいますか。この建物の中ですね。マニラにいますね。私たちは地上にいます。イエスは天におられます。そして聖書には、「わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるため」と書かれています。私たちが住所を移すのです。イエスが来られて、私たちを連れて行ってくださいます。

ご理解下さい。非常に単純です。イエスは私たちを迎えに来ると約束されました。そして私たちのために場所を備えてくださると約束されました。イエスは来て私たちを連れて行ってくださるのです。イエスが天で一生懸命に働いて私たちのための場所を備えてくださっても、私たちがそこに行かないのなら、それに何の意味があるのでしょうか。

この世界には霊的な戦いがあるというをご存知の方々はいらっしゃいますか。その戦いは私たちが目で見ることができませんが、感じるができるものです。その戦いには二つの戦場があります。エペソ人への手紙6章12節にこう書かれています。

「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。エペソ人への手紙6:12」

「どこで」と書かれていますか。ここではありません。天です。今私が話しているこの瞬間にも、天では大きな戦いが行われているのです。ご存知でしたか。驚くべき戦いです。それは私たちに影響を及ぼすのですが、天で起きている戦いです。聖書によると、それは私たちには見ることができないが、戦いには戦場が二つあります。一つは、今それが起きている天における戦場です。天は、神が支配し、また神の選びによってイエスが支配する場所です。「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。(マタイの福音書3:17)」彼は神に選ばれたのです。彼こそが王の王、主の主となられるお方なのです。すべてのものがこの方によって造られたという、そのお方です。ですから、天というのは、サタンが必ず負けることになる場所です。それで、もう一つの戦場は、この地上になります。そして地上は天とは違います。この世界はサタンと、人間の選択によって支配されています。

私たち人間は、新生して聖霊に満たされていない限り、いつも間違っただのを選んでしまいます。私たちのする選択は、わたしたちの罪の性質によって左右されます。

ポンテオ・ピラトがイエスを群衆の前に連れ出した時、彼はその群衆に向かって言いました。「これはイエスだ。でもお前たちが望むなら、私はこっちの男を釈放しよう。」さて、もう一人の男の名前は何かだったでしょう。バラバです。福音書には、バラバの名前がイエスだったと書かれているのをご存知でしたか。イエスというのは、ヘブライ語では一般的な名前でした。ヤシュアといって、救いという意味があります。エズラ記にもネヘミヤ記にも出てくる一般的な名前でした。それで、イエス・バラバという名前の男がいました。そして、ナザレのイエスと呼ばれる男もいました。イエスは御父の子ですね。もう一人のバラバについてですが、バラバという意味をご存知ですか。バル・アバ(バラバ)というのは父の息子という意味なのです。アバとは父のことで、バルとは「～の息子」を意味します。「バルミツバ」が「戒律の子」という意味であるように。「さあ、ここに『御父の子』イエスと、『ある父の子』イエスがいる。どっちを釈放して欲しいのか。」群衆が求めたのはどっちでしょう。間違っただの男です。なぜでしょう。それは、その方が居心地が良かったからです。この男は、私たちが悔い改めなければならないとか、変わらなければならないとか、改善しなければならないとか言わないからです。この男は私たちの偽善や宗教性を暴いたりしないから、私たちは不道徳を続けることができるからです。世界中の巨大教会の多くが、現実に、ナザレのイエスを伝道していない理由は、ここにあるのです。彼らが伝道しているのは、もう一方のイエス、「ある父の子」です。そっちのイエスなら、悔い改める必要がなく、改善する必要がなく、神の御心にかなう歩みをしなくていいのです。

私にはそれが神学理論と呼べるものかどうかも分からないのですが、とにかく、今マニラに入り込んで来ている新しい神学理論があって、「すべての人はもうすでに救われているから、救いの必要はない」、とまで言っているのをご存知ですか。「地獄もないし、携拳もない。すべての人が救われています。」「アドルフ・ヒトラーも救われて天国にいます。ISIS のテロリストたちも天国にいます。誰もが天国に行くのです。」とんでもないですね。でも、考えてみてください。それが人々の聞いたがっていることなのです。もしも、あなたがその罪のうちに死んでいたら、あなたは救われているよと、誰かに言ってもらいたいものです。そして、あなたは変わらなければならないと言われる場所よりも、むしろ、あなたは救われていると言ってくれる場所の方に行くものです。

天は神に支配されていて、この世はサタンに支配されています。面白いことに、天にあるものは最終的に世に移ってきます。ヨハネの黙示録12章には、天で起きている戦いのことが書かれています。サタンは天で敗れるので最終的に地に投げ落とされます。そして第12章から第19章まで、地上で反キリストの形をとったサタン

は、恐ろしい状況を造りだします。特にユダヤ人に対して。しかし、第19章では、サタンは地上でさえも負けることになります。イエスが戻って来られると、彼はサタンを底知れぬ穴に1000年間閉じ込めるのです。

私は小さい頃からずっと、大使になりたいという夢を持っていました。私は、いつの日かイスラエル大使になるために、本当に自分でその用意をしていたのです。世界中を旅して、自国を代表し、イスラエルの存在権利を主張するために。世界中で、です。

神が私を17歳という年齢で、死から救ってくださることになるとは、思いもよりませんでした。両親なしに育った私は、人生のある時点で、希望もなくて、自殺したくなりました。私は注意深く自殺の計画をたて、死のうとして、薬瓶にいっぱい錠剤を持っていました。17歳の時です。この世界には、私には全く希望がないと思っていたからです。私は、私が存在することすら知らない女の子に恋い焦がれていました。僕を見て。僕は存在してない？私は死んでしまいました。

でも、聞いてください。神はそれをご覧になりました。私はその非常に愚かな一歩を踏み出す寸前に、止めました。その翌朝、私は学校で一番仲の良い友人が、イエスを信じるユダヤ人であることに気づきました。彼は、高校の期末テストの勉強をするために、私を自宅に招待してくれました。彼の家に行って、お昼ご飯をいただくために座に着くと、突然みんなが手をつないで目をつぶり、祈ったり、神に語り掛けたりし始めたのです。まるで、神が親友であるかのように。ユダヤ人として、私は、祈りの本はどこにあるんだろうと見回しました。祈りの本はありませんでした。彼らは神に話しかけていたのです。神がその場におられるかのよう。私はビックリして食欲もなくなりました。私は質問し始めましたが、全く何も知りませんでした。それは正しいことのように聞こえましたが、それでも私は理解できませんでした。なぜ、すべての祈りがイエスの名においてなされなければならないのか。なぜ？すると女の子が「神様に聞いてみたらどう？祈って神様に聞いてみて」と言います。それはとても風変わりな答えでした。「僕が？祈る？神に？神さまが僕のことを聞いてくれるの？」「ええ、そうよ。」私はどうやって祈っていいかすらも知りませんでした。それで私は祈りを紙に書いて壁に貼って、ひざまずいてその紙を読んだのです。

「神様、もしあなたが存在するなら、イエスが誰なのか見せてください。」

それだけです。そして私は寝ました。

次の朝、私は目を覚ましました。私は12歳の時から働いていて、登校前に仕事をして、放課後も仕事をしていました。その朝も、学校の前に仕事に行き、こまごました新聞紙を合わせてました。そしてその新聞紙を開いてみて、ぶったまげました。そのヘブライ語の新聞紙に、でかでかと、太字の大文字でヤシュア(イエス)と書かれていたのです。私はその新聞紙を閉じました。自分の頭がおかしくなってるんじゃないかと思って。幻覚を起こしているんじゃないかと思いました。それで、もう一度、ゆっくり、ゆっくり、開いてみました。やっぱり書いてありました。それは、キャンパス・クルセード・フォー・クライストの映画「ジーザス(イエス)」で、エルサレムで二日間だけ、まさにその週に上映されていたのです。しかもヘブライ語で。

神がどれほど私のことを愛してくださっているか、想像がつきますか。映画作品まるごとですよ。私のために。ヘブライ語で。

その映画は実際にイスラエルで撮影されていました。だから私の知っている場所が出てきて、私の知っている言語が話されていて、私の知っている旧約聖書からの預言も入っていました。映画の終わりに、私はイエスを私の主として、救い主として受け入れました。そして家に帰って、皆に「みんな罪人なんだよ」と言ってやりました。私は里親に家から追い出されました。他の家族にもお世話になりましたが、その家族には10年間もお世話になっていたのに。私は自分の両親と暮らしたことがありません。

いいですか、私には外交官になるという夢がありました。私は無名の者で、自殺したいと思っていたのです。私は誰もが知っている何者かになりたかったのです。

面白いですね。私は、大使になったら、世界中を旅するだろうと思っていましたが、神が根本から私の命を救ってくださり、今日、2017年には14か国を旅して、政治ではなく、神のみことばを語るようになることは、私には知

る由もありませんでした。

私が学んだことは、外交においては、ある国が他国に戦争を布告しようとする時、決まってまず最初にするのは、自国の大使たちを呼び戻すことです。違いますか。そうですね。私たちは、他国に戦争をしかける時、その国にいる自国の大使たちが死なないようにしますね。そこで、私たちは大使を呼び戻します。

興味深いのが、ヨハネの黙示録12章でサタンが投げ落とされたので、神は今度は地上で戦われることになります。それはサタン自身だけでなく、すべての人によって地上で行われている悪魔崇拝のためなのです。そして神が、その戦いの寸前に、何をされようとしているかお分かりですか。神は、この世に戦いを布告する前に、その使節たちを呼び戻してくださるのです。そうですね。「えー、私は使節になりたいとは思わないわ。」と言う方、一つ言わせてください。誰もあなたになつてくださいなんて、お願いしてはいません。コリント人への手紙第二5章20節を読みましょう。

「こういうわけで、私たちはキリストの使節なのです。ちょうど神が私たちを通して懇願しておられるようです。私たちは、キリストに代わって、あなたがたに願います。神の和解を受け入れなさい。

コリント人への手紙第二5:20」

好むと好まざるとにかかわらず、あなた方は皆、使節なのです。そしてこの世における皆さんのお仕事は、イエスが私たちを通して懇願されますから、キリストに代わって、神の和解を受け入れるように懇願することです。私たちは人々に神の和解を受け入れるようにと伝えなければなりません。私たちは壁の上の見張り役です。私たちはこの世界に何が起ころうとしているかを知っているのですから、この世に警告を与えなければなりません。私たちは福音を説かなければなりません。人々に救われてもらわなければなりません。すべての人が救われているというのは嘘です。人はイエスを通してのみ、救われることができます。イエスが道であり、真理であり、いのちなのです。イエスによらなければ、誰も御父のもとに行くことはできません。

それから、いいですか。私たち皆が携挙されると思っているとしたら、あなたは間違っています。あれあれ。みんな2秒前まで喜んでいましたんですけどねえ。雰囲気ぶち壊しですね。

一つ言わせてください。近ごろの調査によると、教会出席者の半数以上が信者ではないということです。彼らには主との個人的な関係がありません。彼らは教会の建物を出ると、世に逆戻りして、何でも好き勝手にしたいことをしています。彼らは教会には来るのです。そして献金をして、ハレルヤと口にすれば、大丈夫だと思っています。

神がそんなに年老いておられると思いますか。あなた方のことを日曜日に見るだけで、月曜日や火曜日にあなたが何をしているか見てはおられないと？あなたは神の目をごまかせるとお思いですか。あなたは自分自身をだましているのです。と言うのも、ダビデが罪を犯した時、彼は救いの喜びを失ったのです。彼はみじめでした。そして預言者ナタンによって罪を明らかにされたとき、詩篇51章には、「あなたの救いの喜びを、私に返し」と書いてあります。もしもあなたがクリスチャンを演じているなら、あなたはこの講堂にいる人たちの中で、誰よりも惨めな人間です。一方ではあなたはクリスチャンでありながら、他方ではあなたは本当は違うことを知っているからです。そしてあなたにはその苦闘がつきまとうからです。

一つお伝えしておきましょう。携挙されるための基準、あるいは条件が一つだけあります。ヨハネの福音書11章25～26節で、イエスは携挙のことを非常に美しく語られました。イエスはマルタに語りかけました。

「イエスは言われた。『わたしは、よみがえりです。いのちです。』」

このわたし、イエスが、よみがえりであり、いのちなのだ。他には誰もそんなことを言っている人はいません。「わたしを信じる者は、」というこの部分が条件なんです。「わたしを信じる者は」。あなたはイエスを信じなければなりません。信じると言うことは、イエスのうちにとどまらなければなりません。イエスについて行かなければなりません。イエスに従わなければなりません。イエスはこうおっしゃっています。「わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。」これは、死んだ者たちがまた生きることを示しています。それからまた、こうおっしゃいます。「また、

生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことはありません。」言い換えれば、イエスは、死んだ者たちはまた生き、まだ生きている者たちは死なないとおっしゃっているのです。パウロの言うとおりです。そしてイエスは、聖書全体の中で最も重要な質問をされます。「**このことを信じますか。**」おもしろいですよね。携挙が起こって、反キリストが世に現れて、大混乱や大患難が訪れます。それは確かなことです。動かない事実です。問題は、あなたが信じるかということです。

マタイの福音書24章40～41節に書かれています。

「そのとき、畑にふたりいると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。ふたりの女が臼をひいていると、ひとりを取られ、ひとりが残されます。マタイの福音書24:40-41」

携挙は教会の礼拝中に起こるわけではありません。皆が普通に生活しているときに、あなたには分からない時に、起こります。だから、私たちには用意ができていなくてはならないのです。皆さんは世間に出ているでしょう。職場で仕事をしているかもしれないし、運転しているかもしれません。飛行機の操縦士が二人とも信者だったらどうなると思いますか。二人ともパッと消えるんです。キャビンアテンダントが乗客に何と言うのか、知りたいですね。「どなたか操縦のできる方はいらっしゃいますか？」

皆さんに知っていただきたいのですが、私がよく聞かれるのは、

「それで携挙はいつ起こるのですか。」

その答えが分かっていたら私は億万長者になってるでしょう。

とにかく、携挙はいつ起こるのでしょうか。私には、いつ起こらないか、ということは言えます。2017年9月23日ではありません。その理由は、インターネット中で、これがその日だと言われているからです。私がどうしてその日なのかと尋ねると、こう言われます。

「知らないんですか。ラッパの祭りの日なんですよ。聖書には『終わりのラッパとともに』と書いてあるから、ラッパの祭りの日に違いないんです。」

「へえ、そうなんですか。」

「そうなんですよ。それにもう一つ理由があるんです。星座の位置が、その日には、女が足で月を踏んでいるように見えて、云々」

と言ってきます。私はこう返答します。

「あなたはすっごく頭がいいんですね。とつても頭がいいから、イエスにさえ分かっていないことが分かるんですね。」

それは、聖書には、マタイの福音書24章35～39節において、

「ただし、その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも子も知りません。ただ父だけが知っておられます」

と書かれてあるからです。だから、もしも、あなたにはそれが2017年9月23日だと分かっているとしたら、本当にすごいことです。

聖書は続けます

「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のごとくです。洪水前の日々は、ノアが箱舟にはいるその日まで、人々は、飲んだり、食ったり、めとったり、とついたりしていました。」

ナイトクラブに行ったり、バーに言ったり、何でもです。神のみこころにかなわなような生き方をしているのです。そしてそれらのものに近寄らず、必ず用意ができていようにしていた、ただ一人の人物は、箱舟を準備していたノアでした。ノアには、その日その時がいつなのか分かりませんでした。裁きが来ようとしていること、そのために用意をしなければならないことだけは分かっていました。そして彼は箱舟を用意したのです。

皆さんには、二つの選択肢があります。この辺の有名なクラブに遊びに行ってもいいでしょう。構いませんよ、

どうぞ、好きなように生きればいいのです。したいことをして、酔っぱらって。ある日、それが起こっても、あなたはそこで座って飲んでいるのです。あなたの友人たちがいなくなっているのに。

「そして、洪水が来てすべての物をさらってしまうまで、彼らはわからなかったのです。人の子が来るのも、そのとおりです」と書かれています。未信者たちはあなたのことを理解しないでしょう。でも、洪水が来てすべての物をさらってしまったのです。興味深いですね。

マタイの福音書24章42～44節には次のように書かれています。

「だから、目をさましていなさい。あなたがたは、自分の主がいつ来られるか、知らないからです。しかし、このことは知っておきなさい。家の主人は、どろぼうが夜の何時に来ると知っていたら、目を見張っていたでしょうし、また、おめおめと自分の家に押し入れはしなかったでしょう。だから、あなたがたも用心していなさい。なぜなら、人の子は、(信者である皆さんが)思いがけない時に来るのですから。マタイの福音書24:42-44」

つまり、イエスはその日や時刻がいつなのかを教えていませんが、私たち信じる者たちは、その季節や時を理解するのです。いいですか。YouTubeにある Behold Israel という私のチャンネルの、反キリストの到来に向けてどれほどヨーロッパの状況が整っているかを説明した私のメッセージをご覧ください。

欧州議会はストラスブールにバベルの塔を建設しました。その欧州議会場の外には、獣に乗った女の像が設置されています。ヨハネの黙示録に書かれているとおりに。ヨーロッパには、ビッグ・バンを再現しようと試みている大きな核施設があって、神がいないことを証明しようとしているのです。地下には粒子加速器があって、研究所の外には、破壊の神であるシヴァ神の像が置かれています。その本部はアポリオンという街にあって、アポリオンとは黄泉の国(地下の世界)の長なのです。これらの人々は、ヨーロッパにバビロンを迎え入れることに真剣に取り組んでいるのです。

アドルフ・ヒトラーはナチス党の行進のための場所を、ペルガモンにあったサタンの王座に倣って設計しました。ベルリンにはペルガモン博物館というものが建てられ、ヨーロッパにサタンの王座が持ち込まれました。彼らはイシュタル門というバビロンへの入り口をベルリンに持ち込みました。どうぞご理解ください。ヨーロッパは、反キリストをその領域内から送り出そうと、躍起になっているのです。

そして、反キリストが台頭するためには、まず中東で戦争が起こらなければなりません。聖書には、エゼキエル書38章に、ロシア、トルコ、イランが一緒になって、イスラエルに侵攻すると書かれています。いいですか。ISIS を理由に、ロシアとトルコとイランは、去年の段階ですでにイスラエルの国境にまで来ていたのです。自分たちでもまだ分からないものために準備をしているのです。お見事です。戦争のどこがそんなに見事なのかと？彼らにはまだ分かってもないのに、神はそのリーダーたちが将来に下す決断を、もうご存知だということです。

神が、パロと話をさせるためにモーセを呼び出されたとき、神はすでにモーセに、パロはそれを受け入れないことを告げていました。モーセがまだ行ってもいない時に、神はすでにパロの答えを知っていたのです。神は、リーダーたちが考えを起こす前に、彼らが何を考えるかをご存知なのです。そして神は彼らのことを笑っています。

言っておきますが、準備は整っています。先週、私がボラカイ島にいた時、ビサヤ諸島沖の太平洋の深みを震源として、2017年では世界最大のマグニチュード7.3の地震が起こりました。2017年に入ってから、イタリアのスキー場でホテルを完全に崩壊させた一連の地震を含め、歴史の上でも見たことのないほどの多くの地震が起こっています。地震の記録が始まって以来、史上最多の数です。世界の状況は整っているのです。

携挙のタイミングについては、3つの選択肢があります。患難の前にか、患難の最中にか、患難の後にか、です。別の言い方をすれば、「レア」か、「ミディアム」か、「ウエルダン」か、です。天国にはどのように行きたいですか。私には理解できません。なんで「ミディアム」がいいのですか。なんで「ウエルダン」になりたいのですか。どうし

て完全に焦げてから、つまり、完全に打ちのめされてから天国に行きたいのですか。どうして神はあなたを苦しめたがっていると思うのですか。聖書には、私たちは御怒りに会うように定められてはいない、と書いてあります。事実、聖書には、ヨハネの黙示録3章10節で「わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう」と書かれています。また、テサロニケ人への手紙第一1章10節には、イエスが「やがて来る御怒りから私たちを救い出してください」と書かれています。私たちは患難を体験しないのです。もしも私たちが患難を体験するのなら、一体どうやってお互いを励まし合うことができますか。「おい、楽しいんだぜ。俺たちの頭が通路を転がって行くな。」気でも狂ってるんじゃないですか。とは言え、もしもあなたが居残りたいなら、どうぞご自由に。ただ巻き添えはご免です。

では、携挙の順序を言うと、

- ① イエス・キリストご自身が天から下って来られます。
(ヨハネの福音書14:1-3、テサロニケ人への手紙第一4:16)
- ② そしてイエスは私たちをご自身のもとに迎えてくださいます。
(ヨハネの福音書14:13)
- ③ イエスは、終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちに来られます。
(コリント人への手紙第一15:52、テサロニケ人への手紙第一14:16)
- ④ イエスは、死んで「眠った」信者たちを復活させていただきます。
(テサロニケ人への手紙第一4:14-15)
- ⑤ その時に生き残っている者たちは、空中に「引き上げられ(携挙され)」ます。
(コリント人への手紙第一15:51-53、テサロニケ人への手紙第一4:17)

皆が決まってよく勘違いしてしまうのは、携挙とキリストの再臨を混同することです。その二つを区別する簡単な方法をお教えしましょう。携挙とは、キリストが教会のもとに来られることで、私たちは空中で一緒になります。再臨とは、キリストが教会と共に来られることで、私たちは地に降り立つのです。これが二つの主な違いです。携挙と再臨が別々のものであることを、理解しなければなりません。

テトスへの手紙2章11~13節を読みましょう。

「というのは、すべての人を救う神の恵みが現われ、私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあつて、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。テトスへの手紙2:11-13」

あなたが本物の信者で、世の欲を求めず、慎み深く、正しく、敬虔に生活しているならば、あなたは祝福された望み、すなわち、主と共になれることを待ち望んでいるのです。そして、祝福された望みだけではありません。私たちが主と共に戻って来るときには、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスが栄光をもって現れることになるのです。

この世界には二つの誕生と、二つの死、二つの復活があります。私たちは皆、母親から生まれてきます。私たちはまた、生まれ変わる(新生する)こともできます。人間には、一度死ぬことが定まっています。私たちは皆、死にます。また、第二の死において、永遠に死ぬこともできます。イエスに始まって携挙に続き、患難の終わりに患難中に亡くなった聖徒たちの復活で終わる、第一の復活で甦ることもできますし、あるいは裁かれるためにだけに復活し、永遠の死に定められることもできます。ですから、皆さんは第二の誕生をし、第一の復活に預かるようにしなければなりません。第二の死を経験しなくてよいようにです。

では、次のことをもって本日のメッセージを終えたいと思います。

- ① 携拳はキリストが私たちに約束してくださったもの。
- ② 携拳は信じる者たちにとって祝福された望み。
- ③ 携拳は私たちが悪しきものから救ってくれるもの。
- ④ 携拳は聖徒たちを集合させる。
- ⑤ 携拳は非ユダヤ人たちがイエスを信じるための最後のチャンスかもしれない。

私は神に祈り、全世界に届けるべきメッセージは何でしょうかと尋ねました。これから、インドネシア、日本、オーストラリア、シンガポール、メキシコ、アメリカ、カナダ、ノルウェー、スウェーデン、ドイツ、オランダに行く予定です。全世界に向けてどんなメッセージを伝えればいいのでしょうかと言いました。すると神は、ヨハネの黙示録第22章17節を読みなさいとおっしゃいました。

「御霊も花嫁も言う。『来てください。』」

私たちが主の訪れを望むことを、神が望んでおられることを理解しなければなりません。聖書は、私たちが神に「来てください」と言うべきであるとしています。

ヨハネの黙示録20章22節です。

「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。ヨハネの黙示録20:22」

聖書には、私たちは受動的でなく、能動的であるべきだと書かれています。

マタイの福音書7章7節です。

「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。マタイの福音書7:7」

私たちは、来てくださるよう主にお願いするべきです。問題なのは、私たちの多くが、「来てください」と主に求めないことです。それは自分たちに用意ができていないことが分かっているからです。ある時、私はシンガポール人の牧師の車に乗っていました。彼は私に言いました。

「私にはビジネスから多くの収入があるのです。主よ、感謝します。今、大きな家を建てている最中で、来年完成します。イエスにはまだ戻って来てほしくありません。家が完成するのを見たいし、実際にその家に住んで楽しみたいんです。」

その牧師を見て、私は思いました。「花嫁には用意ができていない…」彼が、地上の富を楽しむことが、イエスが整えてくださったものに匹敵するとでも考えているとしたら、気でも狂っているのではないのでしょうか。イエスは、私たちが迎えに来てくださり、はるばる天にまで、ご自身が整えてくださった場所に連れて行ってくださるのです。数人の働き手によるものではないのです。イエスが備えてくださるんです。聖書によると、純金の大通りや大邸宅(住まい)があるんです。なのに、地上の場所に残ってたいのですか。

最後に皆さんに理解してもらいたいことがあります。皆さんには、訪問し損なってほしくないのです。イエスはエルサレムに来られた時、口バを止めて、涙を流されました。神であるイエスが、エルサレムを見て、涙を流されたのです。どうしてイエスは涙を流されたのだと思いますか。その理由は、イエスが主の訪問を見逃してしまった町を見たからです。彼らにはイエスが彼らを救わなければならない必要性が見えなかったのです。彼らはイエスが世界を支配しなければならぬと考えました。けれど、自分たちの心はイエスに支配されたくなかったのです。彼らは主の訪問を見逃してしまったのです。

ところで、訪問というのは、誰かが来て、そして去っていくことです。皆さんの家にお客さんが来たとして、そのお客さんが去って行かなかったら、それは訪問者ではなくて、寄生虫です。侵入者です。訪問者というのは、訪

ねて来て帰って行く人のことです。外国に旅行すると、帰りのチケットを確認されることがあるのは、このためです。訪問者であって、寄生虫ではないことを確認する為です。イエスは世に来られて、そして去って行かれました。訪問ですね。それと同じように、私たちは天国を訪れて、そして戻って来るんです。私たちが天で過ごす期間は7年間に限られています。そして、私たちはイエスとともに戻って来て、この地を1000年間治めるのです。訪問し損ねないでください。

では、皆さんにお尋ねしたいと思います。全員、目を閉じ、頭を垂れてください。本日、この会場には、用意のできていない方々がたくさんいらっしゃるはずですが、自分には用意ができていないという方は、目を閉じ、頭を垂れたまま、手を挙げてください。あなたの方のために祈りますから。あちらこちらで手が挙がっています。手を挙げていてください。たくさん手が挙がっています。

「お父様、イエスの御名において、あなたが今日、あなたの子もたちの心を揺り動かし、あなたに迎えに来ていただくために、私たちに用意ができていなければならないことを理解させてくださったことを感謝します。あなたが、あなたの子もたちが失われてしまうのを望んではおられないことを感謝します。あなたが怠慢のために戻って来られるのを遅らせていると思う人たちがいても、それは怠慢だからではありません。あなたは誰1人として滅ぶことを望まず、すべての人が悔い改めてイエスの救いの知識にあずかることを望んでおられます。

お父様、今手を挙げていらっしゃる方々のもとにおいでください。彼らが自分たちの罪を認めますように。悔い改めますように。彼らが態度を変えて、神のみこころにかなわない生き方をやめ、世の欲を離れ、今のこの時代に慎み深く、正しく、敬虔に生活し、その祝福された望み、つまり、主とともにあるために集められることを待ち望みますように。

お父様、あなたが、あなたの子もたちを怖がらせることを望まず、彼らに用意ができていることを望んでおられることを感謝します。預言を感謝します。あなたがご自分の御名のために高く上げられたあなたのみことばに感謝します。

お父様、今日ここに集まった一人ひとり感谢您します。

それでは、民数記第6章において、モーセがイスラエルの子らを祝福するためにアロンに命じた祝福をもって、皆さんを祝福したいと思います。どうぞ、ご起立ください。まず、ヘブライ語で祝福してから、英語で祝福したいと思います。目を閉じて、その祝福を受けるために、両手を広げてください。

「『主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。』

民数記6:24-26」

それは、人のすべての考えにまさる平安であり、世が与えることのできない平安であり、平和の君だけがあなたに与えることのできる平安なのです。そして、それは平和の君、主の主、ユダの獅子、神の子羊、イスラエルの聖なるもの、王の王、主の主の御名にあるのです。すべての名に勝る御名、世界中で私たちが救われることのできる唯一の御名、ヤシュア(イエス)の御名において祈ります。アーメン！

このメッセージをご覧になって、イエス・キリストを信じ救われた方、信じたいと思われた方は、こちらまでご連絡ください。 info@divineus.org

あなたは、救われていますか？